

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏名	浜本康夫
論文審査担当者	主査	外科学	北川雄光	
放射線医学	茂松直之		内科学	矢作直久
内科学	金井隆典			
学力確認担当者	河上裕		審査委員長	茂松直之
			試問日	平成28年 7月29日
(論文審査の要旨)				
論文題名：Multicenter questionnaire survey on patterns of care for elderly patients with esophageal squamous cell carcinoma by the Japan Esophageal Oncology Group (JEOGによる高齢者食道扁平上皮がん治療の治療動向に関する調査)				
<p>本研究は高齢食道扁平上皮がん治療の現状に関して日本臨床腫瘍研究グループ（食道がんグループ）43施設に対して実態調査のアンケート調査を実施し国内先端施設の高齢者診療に関する現状を明らかにした。胸部食道扁平上皮がん治療の現状としては、全身状態良好な高齢者に関しては非高齢者治療と同様の治療選別が選択されていることが判明したが選択基準に関しては不明瞭で脆弱な臨床病期II/III（T4を除く）が研究対象として重要と考えられた。</p> <p>審査では本研究の解析における申請者の役割および実務に関して問われた。また方法論として統計解析の必要性、対象施設の規模が問われた。研究の立案、プロトコル作成、解析、図表の作成、論文作成・投稿に関しては申請者が主体となって実施したことが回答された。統計解析に関してはサンプル計算し集計されたデータではないため、統計解析が必須ではないと回答された。次に対象となった施設の特徴および質に関する事項が解析に加味されたか問われた。対象施設は公的な研究資金による多施設共同研究グループとして認知され食道癌診療に関する高度に専門的な施設であることが回答され、アンケート結果は基本的に専門家間におけるコンセンサス形成に重要であることが回答された。また高齢者治療を研究で本研究に類似研究の有無に関して問われた。同様の研究はないものの治療の動向をみた研究や米国SEERデータベースをもとに解析した報告などがあると回答された。なお高齢者診療に対する前向き臨床試験は存在するものの臨床試験対象から除外されていることも多いため脆弱な患者に関する研究が乏しいことも回答された。さらにアンケート回答者に関して偏りが無いかという点が問われた。アンケート回答者は各施設の総意を回答するように依頼しており基本的には診療科の偏りが少ない前提であるが、一部の施設では統一見解を得られないという回答もあったため、ばらつきが生じている可能性があるという回答された。最終的に各施設の現状を確認するためには後ろ向き研究での集計や、前向き研究による症例集積が必要なことが回答された。最後に重要な問題点として高齢者における脆弱性の分類方法に関する定義が問われた。この高齢者分類は、現段階で統一基準がないため施設間格差があることが回答された。国内の後方視的な検討や、今後の方向性に関して議論があり、更なる研究のエンドポイントが問われ生存のみならずQOLも重視した検討が必要であると回答された。</p> <p>以上、現段階では本研究には今後さらに検討すべき課題が残されているものの加齢に伴う診療形態の多様化を観察し国内の現状を確認したという点で臨床的に有意義な研究であると評価された。</p>				